

平成 13 年度試験研究成果

区分	指導	題名	花壇苗の市場データから見た需要動向		
[要約] 花壇苗需要の伸びの鈍化から、首都圏へのパンジーの秋出荷に加え、春先需要への積極的対応を図るほか、秋植え需要の拡大が期待される東北地域の地場市場への出荷拡大が望まれる。					
キーワード	花壇苗	東北地域	5月	企画経営情報部 農業経営研究室	

1. 背景とねらい

近年、ガーデニングブーム等で販売量、生産量とも増加し、本県でも各地で産地化がすすむ花壇苗について、市場データを中心に需要動向を把握した。

2. 技術の内容

(1) 花壇苗全体の需要の伸びは鈍化してきているが、春需要が伸びている。

全国の花壇苗全体の卸売数量は増加しているが、卸売金額の伸びは鈍化しつつあり、卸売価格も過去7年間で最も低くなっている(図1)。

数量が最も多い月は、4月・5月で、価格が高いのは同じく4月・5月のほか、9月・10月も高い(図2)。5月は数量増加しても価格変わらないことから需要はまだ拡大しつづけるものと推察される。一方数量の増加が最も多いのは10~12月だが、単価は一時期のような高値は望めなくなっている(図3)。

(2) 秋から冬の主力品目のパンジーが最も多いが、春はペチュニアが伸びてきている。

品目別の動向は10~12月中心に3月まで出回るパンジーが全体の4分の1を占め、以下春から夏のペチュニア、夏のサルビア、春から夏のマリーゴールドが続く(図4)。

(3) 中部地域では10~12月の出荷金額の比率が高い。

本県の主力である、秋だしパンジーの出荷時期である10~12月の地域別の比率を見たところ、特に中部地域が高い比率となっていた(図5)。市場関係者からの聞き取りから、愛知県では観葉植物等の鉢花生産者がパンジーの生産に切り替えていること、また秋植を目的とした購入も増えているとのことであった。

(4) 10~12月の花壇苗の単価は関西が最も高い。

花苗の単価を月別に地域別にみると10~12月は関西と四国が最も高かった(図6)。関東、東京は需要量も多いが、単価も低い。

(5) 東北の他県では、パンジーを東北地域にも一定程度出荷している(図7)。

(6) 東京都内の小売店の聞き取りでは、春苗の選択のポイントは、虫が付きにくいこと、梅雨を越せること、夏場の暑さに耐えうること。また秋の苗の選択ポイントは、長く楽しめること、としていた。

需要の伸びが鈍化しており、商品性向上とコスト低減による差別化、信頼の確保が重要である。これまでの秋だし作型に加えて、需要の拡大が見込まれる4~5月出荷の春苗への積極的な対応を考える必要がある。

10~12月の秋だし花壇苗の出荷先は、単価の高い関西地域や今後需要の伸びが見込まれる東北地域も検討する必要がある。

3. 指導上の留意事項

東北地域を出荷先として想定するにあたり、品目、品種、栽培法の検討際には寒冷気象への対応が重要となる。

4. 技術の適応地帯

県下全域

5. 当該事項に係る試験研究課題

(428) 農産物の市場動向分析(H13-17 県単)

6. 参考文献・資料

2000年度版日本フラワービジネス年鑑(農村文化社)

花き市場流通調査概要(平成6~12年(社)日本花き卸売市場協会)(図1、図3、図5、図6)

平成12年東京都中央卸売市場年報花き編(東京都)(図2、図4)

平成10年産花き生産出荷統計(図7)

7. 試験成績の概要

[成果の概要]

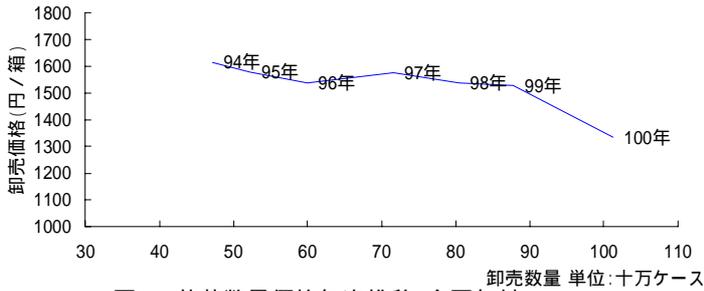


図1 花苗数量価格年次推移(全国年計)

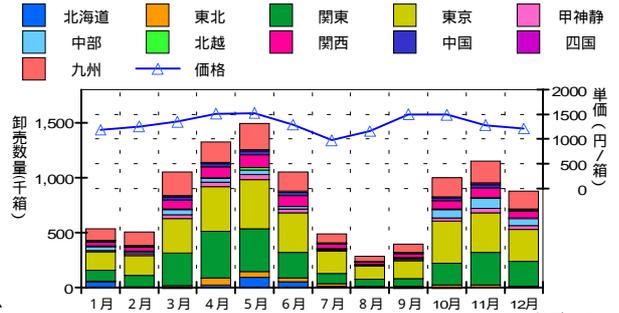


図2 花苗月別数量単価推移

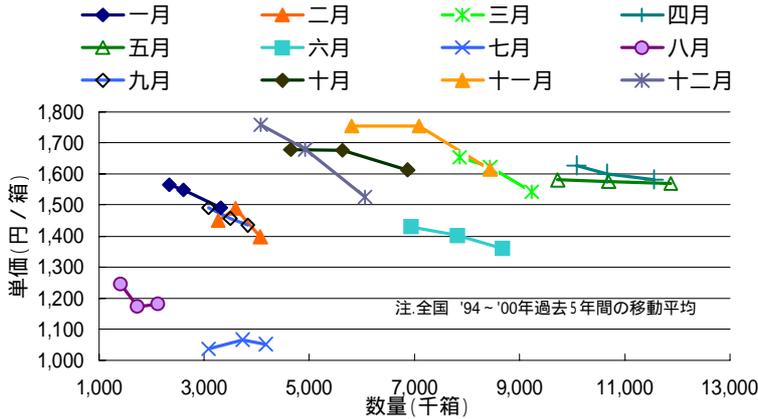


図3 花壇苗月別市場動向(数量、金額、単価)

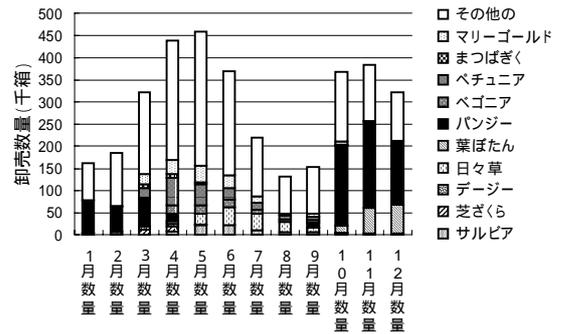


図4 都中央2000花壇苗品目別

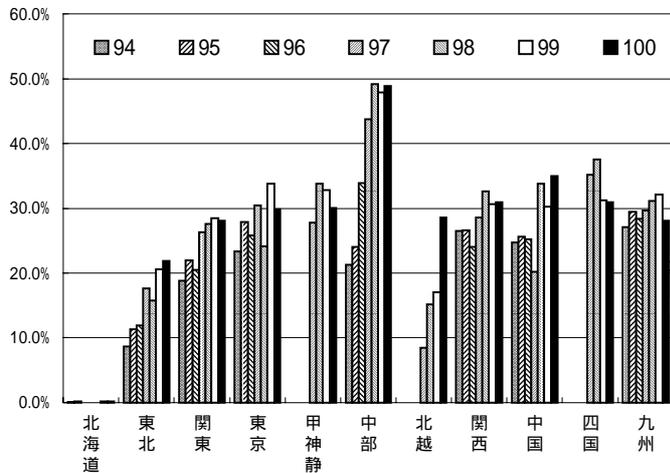


図5 花苗地域別10~12月出荷金額対年間比率

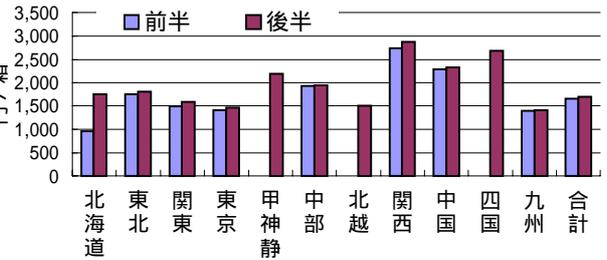
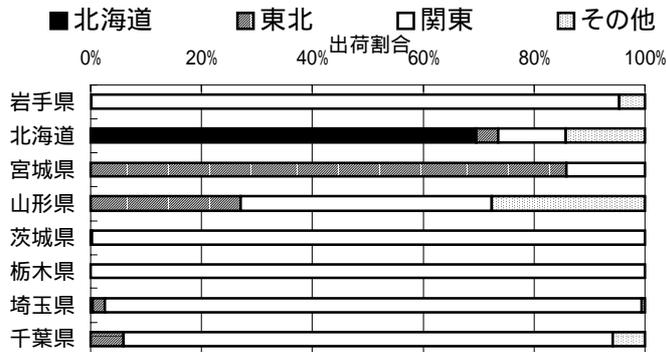


図6 地域別10~12月の花苗の単価



注 岩手県は平成12年岩手県経済連実績
他道県は平成10年産花き生産出荷統計

図7 パンジー産地別仕向け先割合